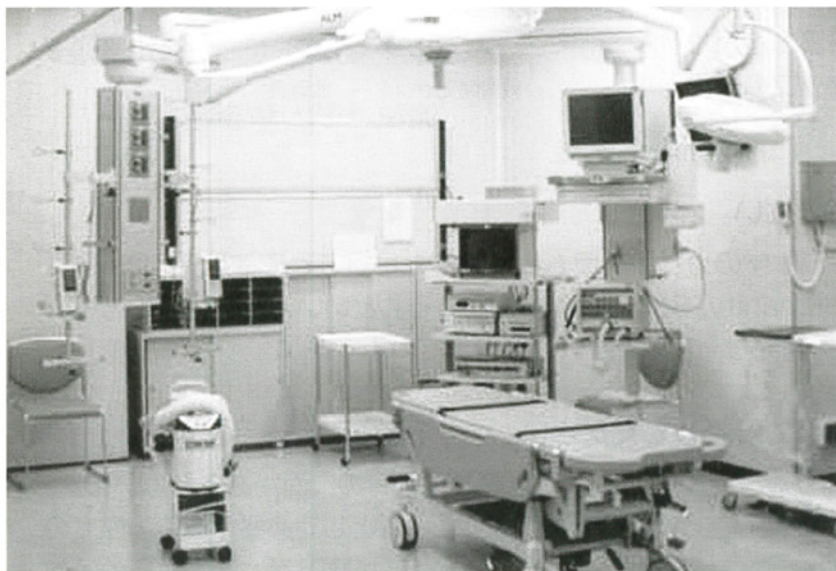


奈良県立医科大学 学報

July
2004

vol.9



高度救命救急センター

CONTENTS

高度救命救急センターの新築移転にあたって	1
インタビュー（教育開発センター・森田教授）	2
平成15年度特別会計決算／ 定位放射線治療装置の整備について	3
研究紹介（薬理学教室）	4
研究紹介（第一内科学教室）	5
研究紹介（看護学科）	6
チェンマイ大学との交流報告／オープンキャンパスの実施	7
平成16年度科学研究費補助金の決定	8~10
看護部より／国家試験結果 レポート	11 12~13
奈良県立医科大学公開講座の開催について／ 平成16年度 奈良県医師会学術奨励賞受賞者決定／ 管財課技術職員表彰／下ツ道	14

高度救命救急センターの新築移転にあたって

附属病院 病院長 高倉 義典

附属病院第2本館の建設も昨年10月のC病棟の完成と、本年6月の高度救命救急センターの移転をもってほぼ完了いたしました。

平成9年4月に設置されました救命救急センターは、昨年9月1日付けで、特に高度な診療機能を有する「高度救命救急センター」の指定を受けました。全国では16番目、近畿では3番目にあたり、広範囲熱傷、指肢切断、急性中毒等の特殊疾患患者に対する救命医療を行うために必要な高度な診療機能を有していると評価されて承認されました。そのため、この度の新築移転に際して、ベッド数も20床から40床に増床し、医療スタッフも増員しました。さらには最新鋭の電子カルテ対応のモニターや最速のヘリカルCTなども導入し、県内の救急医療に貢献していきます。

なお、高度な救急医療を担っていくためには、施設や設備の充実とともにそれに対応できる医師や看護師の養成が重要課題であり、また、県内の救急救命士の育成にも努めなければなりません。

今後は、新しい施設や設備を活用し、県民から信頼される附属病院として、高度な最新の医療を提供してまいりたいと考えています。

1. 新しくスタートした教育開発センターについてご紹介ください。

まず、スタッフについてですが、兼任のスタッフとして、車谷・城島両教授、岡本・藤本両助教授、石指・和田・青山各講師の7人の先生方に加わっていただきました。教育専任の部局を置く大学は多いのですが、看護学科も含めたこのような大所帯は他にありません。皆さん熱意に溢れていますので良い仕事が出来ると思っています。また、秘書の辻川さんは教員免許を取得されているのでスタッフの一員として期待しています。



教育開発センター 教職員
(前列右から2人目が森田教授)

2. センターの役割についてご説明ください。

一言でいうと医学教育を研究・開発し、本学のカリキュラムに生かすということです。W. Oslerは「医学の教育とは医師に求められるArt, Humanity, Scienceの教育である」といいました。この三者について本学の特色が出るように教育手法を開発し、実現できればと考えています。

3. 日本の医学教育の現状について簡単に解説してください。

医学教育には、サイエンスとしての医学の教育と職業人としての医師の教育の二面があると思います。ご存知のように欧米はprofessional educationであり、知識のみならず医師として必要な技能・態度の教育を入学時より始めています。日本ではこの点が不十分でした。このことが原因で、日本からの医学生生の留学をイギリスが拒否してきたのです。そこで政府はglobal standardに見合う教育体制への改革を積極的に推進するようになりました。モデルコアカリキュラム、共用試験、クリニカル・クラークシップ、臨床研修の必修化がそれに当たります。Early exposure、PBL-tutorialといった新しい教育手法の導入も推奨されています。国が医学教育の質をコントロールする時代になったということでしょう。

4. 改革の方向はどのようなものでしょうか？

職業教育の観点から医学教育を見直すことは必要ですが、欧米の教育手法を社会的・文化的・教育的背景を無視してそのまま導入すると、日本の医学部・医科大学は専修学校になってしまう可能性があります。理念を取り入れて、欧米の模倣でない日本独自のシステムを考えていくべきだと思います。

5. 奈良医大の目指している特色ある教育とは例えばどんなものでしょうか？

まず、現在、社会のニーズとなっている医療安全・危機管理の教育を「心の教育、人間性の教育」として捉えて、医療倫理の教育を6年一貫で行うことを考えています。次に、「良き臨床医は良き教育者である」の言葉に示されるように「教育者としての能力を持った医師」を育成することです。この二つを実現して「特色ある教育支援プログラム(教育版COE)」を取得できるようにしたいと思っています。

6. 今後の抱負について

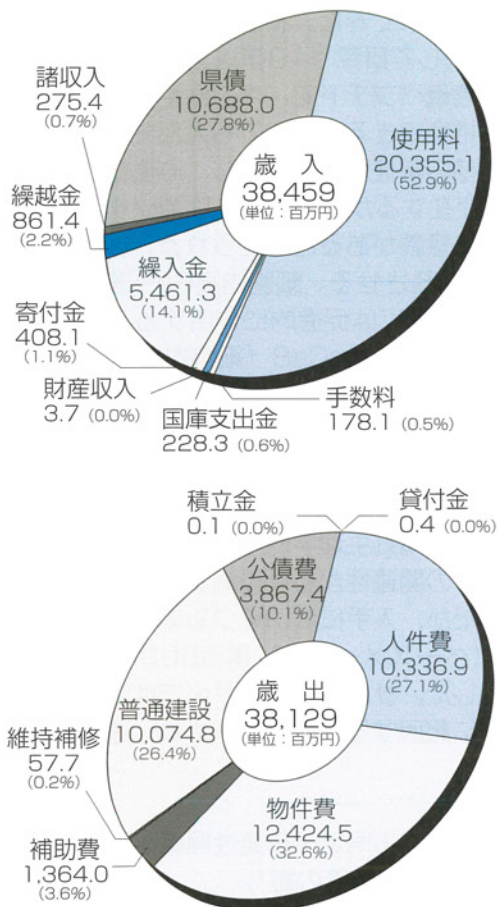
欧米の模倣ではなく、真に日本にあった教育のあり方を皆さんとともに考え、奈良医大方式として全国に発信していきたいと考えています。できれば、日本医学教育学会総会を奈良で開催したいと思っています。皆様のご協力を紙面を借りてお願い致します。

平成15年度 奈良県立医科大学費特別会計決算

平成15年度の決算は、病院使用料収入が対前年比7%の増加となりましたが、それに伴って歳出においても医薬材料費等の支出が対前年比10%増加し、前年度と比べて収支は悪化しました。また、C病棟の施設、備品の整備のために県債の発行額が前年の2倍を上回る増加となりました。

平成16年度以降、一般会計からの繰入金の削減や県債償還額の増加により収支の一層の悪化が予想されます。今後も従前以上にさらなる病院使用料収入の確保、経費節減、合理化等、歳出の削減に努めていただきますようお願いいたします。

(総務課)



歳入決算額	38,459百万円
	(対前年度5,504百万円、16.7%の増)
歳出決算額	38,129百万円
	(対前年度5,923百万円、18.4%の増)
収支差引額	330百万円
	(対前年度△419百万円、55.9%の減)

(参考)

使用料：主なものは病院使用料（診療報酬）

繰入金：一般会計繰入金…一般会計から財源補填のために支出されるもの

基金繰入金……交流会館の整備を行うため、大学整備基金を取り崩す

諸収入：主なものは、研究生の授業料、専修生の受講料

県債：第二本館（C病棟）等の建設工事費に係る借金

普通建設：第二本館（C病棟）等の建設事業費

物件費：人件費、維持補修費、補助費等以外の経費の総称で、委託料等がある

補助費：主なものは、奨励会交付金、各種協会等の負担金、臨床研修医等への謝金等

公債費：過去に借り入れた県債の元利償還金

定位放射線治療装置（ノバリス）の整備について

現在、最新の放射線治療装置である定位放射線治療装置（ノバリス）の施設・設備整備を平成16年度内の稼働に向けて、進めています。

ノバリスは、治療目標となるガンに対し、1mm以内の非常に高い精度での放射線照射を可能とする、最先端の高精度放射線治療装置です。脳腫瘍等のみならず、肺等体幹部も治療可能であるため、多くの患者の疾病治療の推進に、ひいては本学附属病院の経営改善にも効果が期待されるところです。



(病院管理課)

薬理学となら（奈良）

薬理学講座 講師 佐藤 広康

細胞外からの情報（薬物、生理活性物質）は薬理的受容体とイオンチャンネルなどを介して標的器官細胞内に伝達される。洞房結節細胞、心房心室筋細胞、血管・子宮平滑筋細胞、味蕾細胞、中枢神経細胞などを研究している。新薬の開発にも微力ながら参加しており、臨床薬としてデビューするとうれしいもので、臨床試験途中で中止に追い込まれると虚しいものがある。

最近、和漢薬が医学教育コアカリキュラムに組み込まれ、注目されてきた。和漢薬の薬理学研究も始めているが、動植物由来の薬物、タウリンとカフェインを今でも継続して研究（10年以上）している。ここでは、タウリンについて少しだけお話を。魚介類に多量にある含硫ペプチドで、ネコは全く体内で産生できないので餌として摂取するしかない。魚を喰ったイメージから推察できる。ヒトでも大部分を外来の食物から補給している。タウリンは肝機能、網膜での視覚など多種多様の薬理作用を現わし、心筋細胞への効果も著明。健常時、心筋細胞には大量のタウリン(10-20 mM)が存在するが、虚血時には減少することが判明している。このような病態時にタウリンを投与することは十分に意義があると考えられる。虚血性心疾患では細胞内Ca²⁺濃度が過剰になり、不整脈や心不全などの疾患を誘発させる。細胞内高Ca²⁺濃度下、タウリン投与は膜イオンチャンネルの活性を抑制する。逆に、低Ca²⁺濃度下では促進的に作用する。図1に示すように、単一心筋細胞の活動電位持続時間（時間的中）に著明に観られる。pCa8（細胞内低Ca²⁺濃度）下で短縮し、pCa6（高Ca²⁺濃度）下では延長して、細胞内Ca²⁺濃度を調節する。この根底の機序は遅延整流性K⁺電流やCa²⁺電流などのイオンチャンネル制御である。つまり、タウリン作用は細胞内Ca²⁺濃度を一定に保持するホメオスタシスの重要な役割を担っていることを強く示し、心筋細胞保護作用をもつ。私がこれまで解明してきたタウリンのイオンチャンネルへの電気薬理作用を図2にまとめた。

話は違って、洞房結節研究が私のライフワークと自負しており、電気生理学的解析だけでなく、和漢薬の薬理作用から電顕組織学的解析まで行っている。現在は、ヒトとの関連性からサル洞房結節細胞の自動能機序解明に展開させている。薬理実験の限界でサルを代用するのだが、入手にはいくつもの壁がある。これまでの実験成果から、サル洞房結節細胞の過分極活性化内向き（ペースメーカー）電流(I_f)が、ウサギやモルモットとは違って、ラット、マウスに類似していることが判明した。サル心臓がウサギではなく、ネズミに類似していることは驚きである。これはチャンネル(HCN)遺伝子に起因するものと推測され、遺伝子埋め込み実験を開始している。

これまでの研究内容を項目で示すと、

1. 洞房結節細胞の自発性拍動の機序解明：①各種の膜イオンチャンネル同定・自発性興奮への寄与 ②自律神経系作動薬によるイオンチャンネル機構 ③自動能に寄与する微量元素の寄与
2. 臨床使用薬剤の心筋・平滑筋（血管・子宮）細胞への薬理効果および作用機序解析：①細胞内情報伝達系 ②活動電位波形への薬理作用 ③膜イオンチャンネルの薬理的修飾作用 ④Ca²⁺過負荷下、細胞内Ca²⁺動態の薬理効果 ⑤漢方医薬剤の含有生薬成分の電気薬理学作用
3. 異種動物洞房結節細胞の自発興奮機序解明とその相違点：①ヒト洞房結節細胞への近類似性 ②電気生理・薬理的および解剖組織学的解析
4. ES細胞・胎生期心筋細胞の分化・発育および再生：①ES細胞、胎生期細胞の自動能メカニズム解析、②胎生期-出生後膜イオンチャンネルの発現・衰退
5. 和漢医薬学の医学的歴史と臨床薬理学：①作用機序解明と臨床適用との関連性、②健康機能食品の臨床応用

今後もこれらを基盤にして、さらに奈良医大で展開していければと考えている。

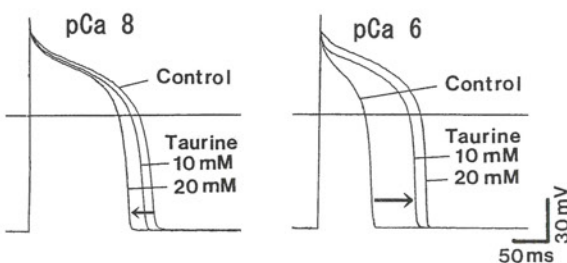


図1 心室筋細胞活動電位へのタウリンの作用

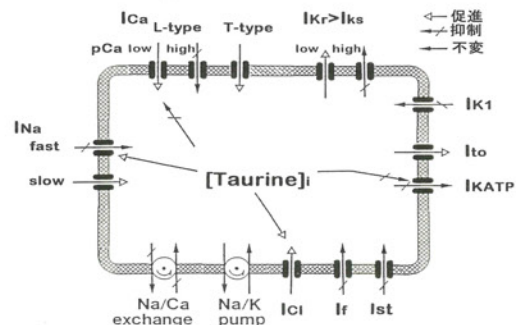


図2 タウリンのイオンチャンネル薬理作用

虚血性心疾患や虚血下肢に対する再生医療の開発とその分子基盤に関する研究

内科学第一講座 教授 斎藤 能彦

虚血性心疾患や閉塞性動脈硬化症は生活の欧米化に伴いその頻度が増加すると共に重症化しており、新しい治療法の開発が待たれるところであります。第一内科学教室では、社会的ニーズに応えるための、基礎的および臨床的研究を開始しています。

1. マウスを用いた基礎的研究

昨今、虚血性疾患の治療過程における骨髄細胞の寄与が注目されています。当教室では、GFP (Green Fluorescent Protein) を全ての細胞で発現するグリーンマウスの骨髄を同種の野生型マウスに骨髄移植し、そのレシピエントマウスで急性心筋梗塞モデルの作製や、大腿動脈内膜剥離術を行うことにより、急性心筋梗塞治療過程や大腿動脈剥離後の内膜肥厚に対する骨髄細胞の貢献度を検討しています。また、当教室の特徴として、急性心筋梗塞モデルの作製と大腿動脈内膜剥離術を同一マウスに同時に施行する系を確立しており、急性心筋梗塞そのものの骨髄から末梢組織への幹細胞の動員に及ぼす効果も検討することが可能となっております。現在、急性心筋梗塞そのものが、大腿動脈内膜剥離術後の内膜肥厚を助長する方向に関与している可能性を見いだしており、「病巣局所と骨髄」、「骨髄とさらに遠隔臓器」との相互関係を解明したいと考えています。

2. 急性心筋梗塞症における骨髄幹細胞誘導因子の検討

急性心筋梗塞の治療機転では、多型核白血球は創傷を増悪させる方向、単球は治癒させる方向に働くことが示唆されています。また、近年急性心筋梗塞急性期には骨髄由来内皮細胞前駆細胞が末梢血中に増加しているとの報告もあります。従って、心臓局所と骨髄の間には何らかのクロストークが存在していることが仮定されますが、我々は、急性心筋梗塞時に、単球や骨髄間葉系幹細胞の骨髄からの動員に関与する因子の検索を臨床サンプルを用いて検討しております。いろいろな候補分子の中で、PIGF (Placental Growth Factor) が、急性心筋梗塞症例で有意に血中濃度が上昇していることを確認し、その血中濃度が末梢単核球数と有意に相関していることを発見しました (図1)。PIGFのほか骨髄に作用しうる分子の中でVEGF (Vascular Endothelial Growth Factor) も血中濃度の上昇を認めましたが、この値は単核球数とは有意の相関を示しませんでした。また、冠静脈洞でのPIGF濃度が大動脈起始部のそれより高いことから、急性心筋梗塞時には心臓でPIGFが産生されていることが臨床的に証明されました。以上、急性心筋梗塞症で心臓と骨髄とのクロストークにPIGFが一部関与していることが示唆されました。

3. 虚血下肢および急性心筋梗塞症、重症虚血性心筋症に対する再生医療の開発

本年より輸血部藤村吉博教授と、心臓血管外科谷口繁樹教授の多大なご協力の下、上記再生療法を開始致しました。

虚血下肢では現在まで3例施行しております。当院では自己骨髄液約800mlから約10億個の骨髄単核球を分離し、虚血部位に筋肉内注射いたします。1例目は急性の大動脈閉塞症の症例で、再生療法を行いました。自覚症状は改善したものの、他覚的にはそれほど改善せず、結局下肢切断となりました。第2例目、3例目は慢性閉塞性動脈硬化症の症例で、移植後経過は良好で自覚症状、下肢の血圧低下やサーモグラフィーの改善を術後2週目より認めております (図2)。やはり、側副血行路がある程度に発達している症例で再生療法の効果が大きい可能性が示唆されます。

急性心筋梗塞に関しては未だ1例のみですが、初回前壁心筋梗塞に対して、発症当時通常通りの冠動脈再開通療法を施行した後、発症後3-4日目に末梢血より幹細胞を含む単核球分画を分離し、約10億個の単核球をカテーテルを通して責任冠動脈に移植しました。移植後、合併症は全く観察されず順調に回復され、発症2週間後には左室の駆出率が51%から55%に改善し元気に退院されました。

再生療法はまだスタートしたばかりの方法ですが、更に症例を重ね確実な医療へ発展させていきたいと考えております。

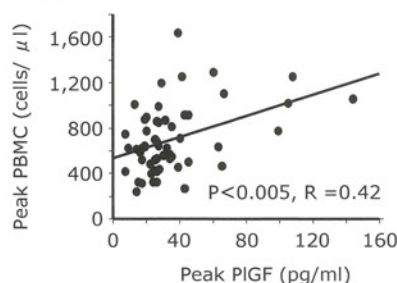


図1. 血中PIGF濃度は急性心筋梗塞後上昇しておりそのピーク値は単核球の数と正相関を示した。



図2. 左下肢に移植後サーモグラフィーにて皮膚温度の改善が認められる。右下肢は幼少時の交通事故で変形している。

児童思春期発症統合失調に関する臨床的研究

病態医学 教授 飯田 順三

私は看護学科に所属しているので、本来ならば看護学科の先生方とともに看護を見据えた研究をすべきであると思うが、まだそれに関する研究は行っていない。現在のところは児童思春期精神医学が専門であるので精神医学教室の児童思春期班の仲間とともにいくつかの臨床的研究を行っている。その中には本学報6号の研究紹介で掲載された注意欠陥/多動性障害（AD/HD）の事象関連電位もある。今回は私たちが行っている児童思春期発症統合失調症に関する研究を紹介したい。子どもを扱っているので、研究に関して、極力侵襲的にならないようにすることとインフォームドコンセントに配慮している。また臨床的に役に立ち、患児に還元できる研究を心掛けている。

1. 児童思春期発症統合失調症に関する身体小奇形と神経発達障害との関連性

現在成人期発症統合失調症に関する研究では神経発達障害仮説が唱えられており、胎生期・小児期より神経発達障害があり、その脆弱性に加えて何らかの環境要因が重なることで発症するのではないかとされている。しかし児童思春期発症統合失調症が成人期発症のものと同じと考えてよいのかどうかは明らかでなく、世界的に研究は進んでいない。神経発達障害を示唆する所見として身体小奇形が指標となる。そこで我々は児童思春期発症統合失調症の身体小奇形について研究を行ったところ、児童思春期発症型は成人期発症型よりも身体小奇形が多く、成人期発症型よりも神経発達障害が強いことが示唆された。さらに身体小奇形のスコアは側脳室の指標であるVBR（Ventricular Brain Ratio）と相関していた。つまり児童思春期発症統合失調症は身体小奇形が多く、身体小奇形の度合いが強いほど側脳室が開大していることが示された。

2. 児童思春期発症統合失調症のサブタイプに関する研究

児童思春期発症統合失調症を臨床的に観察していると2つのタイプに分けられることが我々の研究で明らかになってきた。つまり発症前の前駆期より強迫症状を示す群と強迫症状を示さない群である。そして前駆期より強迫症状を示す群は男性に多く、周産期障害が多くみられた。さらに前駆期が長く、潜行性発症が多くみられた。臨床症状においても陰性症状が多くみられ陽性症状が乏しかった。つまり発症前の前駆期より強迫症状を呈する児童思春期発症統合失調症は一つのサブタイプと捉えることが可能であることを明らかにした。さらに児童思春期発症統合失調症のMRI画像所見では、このサブタイプは左海馬が小さいことが明らかになった。つまり児童思春期発症統合失調症では前駆期に強迫症状を呈するサブタイプが存在し、特徴的な臨床像を呈するとともに、脳画像所見においても左海馬が小さいという構造的異常を呈し、より神経発達障害が強く関与する群であることを明らかにしてきた。

今後はさらに縦断的経過を辿ることによって、発症後の異常について研究し、さらに薬物治療の有効性が少ないといわれている児童期発症統合失調症についての薬物療法を含めた種々の治療について検討していきたいと思っている。

また今後は自閉症などの発達障害に関する出現率、地域における療育のあり方、親のサポート体制などについて看護学科の先生方と協力して研究を行いたいと思っている。



今回で第5回目となるチェンマイ大学への学生の派遣が平成16年3月28日から4月6日の日程で実施されました。派遣された学生は、3年生と4年生の8名であり、第一解剖学の東野教授に引率され、現地での研修、学生との交流、そして古都チェンマイとバンコクの観光と充実した日々を過ごしました。

参加した学生からは、「大学附属病院の医療水準は、日本のものとあまり差はないが、都市から離れると、医師・看護師が極端に不足しているので、primary care unit と呼ばれる地域医療施設では医師は常駐せず、まず最初に一般の職員が患者の観察を行っている」という現地の医療情報が寄せられました。

なお、今年度については9月に説明会を実施し、参加学生の募集を行う予定です。

7月31日(土) オープンキャンパス実施 ～ ボランティア募集～

(学務課)

前年度に引き続き、今年度も夏休み中にオープンキャンパスを実施します。

実施内容は、下表のとおりです。なるべく多くの方が参加されるよう、お知り合いに医学・看護に興味、関心を持っている高校生・受験生の方がおられたら教えてあげてください。

また、主な対象は、高校生及び受験生ですが、地域に貢献する県立大学という本学の性格上、対象者を限定しておりませんので、どなたでも参加することができます。

前年度は、施設見学のみ事前申込みが必要でしたが、今年は当日受付で先着順に整理券を配付することとしましたので、事前申込みの必要はありません。

時 間	実 施 内 容
12:30～13:00	受付・施設見学申込み
13:00～13:50	講演会『医学と看護におけるサイエンスとアート』 学長 吉田 修
13:50～14:05	会場移動 ※医学科と看護学科で会場が別になります
14:05～14:15	学科紹介 医 学 科：吉原医学科長 看護学科：伊藤看護学科長
14:15～15:00	在学生から受験生へのメッセージ
15:00～15:10	休憩
15:10～15:40	模擬ミニ講義 医 学 科『肝臓を守ろうーやさしい肝臓病の話ー』 第三内科学教授 福井 博 看護学科『看護を学ぶ』 小児看護学教授 江上 芳子
15:40～17:10	施設見学 附属病院・総合研究棟・基礎医学校舎・看護学科校舎等を見学
15:40～17:30	個別相談 入試・教務・厚生コーナー 教員による相談コーナー 在学生による相談コーナー

今年度は、看護学科の開設により、医学科・看護学科合同で実施しますので、多数の参加者が見込まれます。

については、在学生の方で当日の受付、施設見学及び個別相談を手伝ってもらえる方を募集しています。ボランティアの受付は、学務課厚生・入試係で行っています。

関係者の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



平成16年度 科学研究費補助金の決定



(研究支援室)

平成16年度の文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金が次のとおり決定されました。

件数 89件 金額 183,900千円
(72件) (176,800千円) ()内は平成15年度

研究種目	所属	職	氏名	研究課題	研究期間
特定領域研究(2)	第一内科学	教授	斎藤 能彦	遺伝子変異動物を用いたナトリウム利尿ペプチド系の虚血再灌流傷害における意義の解明	12~16
	生物学	教授	大西 武雄	分子シャペロンを併用した放射線・温熱癌治療法の基礎的研究	12~16
	第二解剖学	教授	和中 明生	前脳底部コリン作動性神経特異的コンディショナルノックアウトマウスの作成と解析	16
基盤研究(B)(1)	耳鼻咽喉科学	教授	細井 裕司	最重度難聴者用補聴システム開発のための超音波聴覚の応用研究	15~17
基盤研究(B)(2)	脳神経外科学	教授	榊 壽右	硬膜動静脈瘻モデルにおける血管新生関連因子発現と遺伝子治療	14~16
	寄生虫学	助教授	吉川 正英	マウス胚性幹細胞の肝細胞への効率的分化誘導-細胞移植治療にむけて-	14~16
	化学	教授	大崎 茂芳	新素材としての蜘蛛の糸が紫外線で力学的に強化される機構の研究	15~16
	分子病理学	教授	國安 弘基	癌細胞由来サイトカインによる癌の宿主免疫系からの逸脱機構に関する研究	15~16
	小児科学	講師	杉本 充彦	生理的血流下での血栓形成メカニズムの解明	15~17
	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	皮下における肝臓器新生の試み	15~17
	口腔外科学	教授	桐田 忠昭	口腔癌における放射線・化学・温熱療法施行後のアポトーシス関連遺伝子発現応答	15~17
	病理病態学	教授	小西 登	ヒト前立腺癌における新規遺伝子PCA-1の同定と応用に関する研究	16~17
	第一内科学	教授	斎藤 能彦	NRSF/NRSE系による転写制御機構の破綻と慢性心不全発症・進行機序の解明	16~17
基盤研究(C)(1)	公衆衛生学	助手	御輿 久美子	アカデミック・ハラスメントの実態調査研究	14~16
基盤研究(C)(2)	麻酔科学	講師	川口 昌彦	脊髄虚血後の細胞死の機序及び治療法の検討	13~16
	小児科学	助教授	嶋 緑倫	血友病A遺伝子治療における凝固動態および活性化機構に関する基礎的研究	14~16
	整形外科	教授	高倉 義典	再生医療技術を応用した人工関節の固着性に関する実験的研究	14~17
	救急医学	助手	前田 学	骨肉腫、その他の固形癌の血清診断KITの開発	14~16
	病理診断学	講師	吉川 隆章	骨髄間葉系幹細胞による骨および皮膚の再生治療研究	15~17
	総合医療学	教授	中村 忍	超音波を利用した悪性腫瘍治療法の開発に関する基礎的研究	15~16
	保健体育	講師	石指 宏通	運動時の血栓症予防に関する研究	15~16
	第一解剖学	講師	秦野 修	副腎皮質と生殖腺の共通原基の分化と組織形成の分子機構	15~17
	病理病態学	講師	中村 光利	脳神経腫瘍における再発・悪性転化の原因遺伝子群に関する研究	15~16
	第三内科学	教授	福井 博	重症肝障害における多臓器不全発現と生体内各種マクロファージ機能	15~17
	第一内科学	講師	上村 史朗	急性心筋梗塞の治癒機転に関わる骨髄由来幹細胞の誘導・分化機序の統合的検討	15~16
	第二内科学	教授	木村 弘	睡眠時無呼吸症候群における低酸素・再灌流ストレスと動脈硬化促進因子に関する研究	15~16
	第一内科学	講師	岩野 正之	腎間質線維化の進展におけるHIF-1を中心とした低酸素応答への関与	15~16
	輸血部	教授	藤村 吉博	多彩表現型血栓症を示すVWF特異的切断酵素の活性低下の病態解析	15~17
小児科学	講師	田中 一郎	インヒビター保有血友病における抗イデオタイプ抗体誘導機序に関する研究	15~16	

研究種目	所属	職	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究(C)(2)	精神医学	助教授	中村 祐	N2a細胞における酸化的ストレスによるDNA損傷修復蛋白DDBIの動態の解析	15~16
	放射線腫瘍医学	助教授	吉村 均	放射線照射によるMetallic Stent近傍の線量擾乱と測定法に関する研究	15~16
	消化器・総合外科学	助手	高 濟峯	進行肝細胞癌治療を目的としたドナー骨髄造血幹細胞ミニ移植併用生体部分肝移植	15~17
	脳神経外科学	助教授	川口 正一郎	内頸動脈閉塞性病変に起因する虚血性網膜症の予防と対策	15~16
	整形外科	助手	朴木 寛弥	ラット骨軟部腫瘍における酸素分圧の不均一性と腫瘍細胞への影響	15~16
	整形外科	講師	富田 恭治	骨髄間葉系幹細胞を用いた血管柄付きハイブリッド人工骨の開発	15~17
	麻酔科学	教授	古家 仁	脊髄虚血に対する保護物質としてのデルタオピオイドの基礎的研究	15~18
	泌尿器科学	助手	田中 基幹	前立腺癌に対する、PTEN癌抑制遺伝子による治療応用への可能性	15~16
	消化器・総合外科学	助教授	金廣 裕道	小腸移植における拒絶反応メカニズムの解明と血管新生を標的とした新たな治療法の開発	15~16
	口腔外科学	講師	川上 哲司	種々のストレスによる顎関節滑膜細胞の応答	15~16
	口腔外科学	学内講師	川上 正良	顔面骨格パターン形成を制御する分子メカニズムの解明	15~16
	第一生理学	講師	和田 佳郎	動体視力の向上を目指した頭部-眼球協同運動の戦略	16~17
	第一内科学	助教授	金内 雅夫	2型糖尿病のより広範な一次予防に向けての地域啓発型モデル事業の展開	16~18
	第一生理学	講師	豊田 ふみよ	性フェロモンの作用機構に関する研究	16~17
	輸血部	助手	松本 雅則	血栓性微小血管障害症での高度腎機能障害の成因としてのADAMTS-13解析	16~18
	皮膚科学	教授	宮川 幸子	天疱瘡における発症感受性遺伝子候補領域における新規SNPの同定	16~17
	皮膚科学	学内講師	新関 寛徳	紫外線による免疫抑制効果におけるTLR4の役割	16~17
	皮膚科学	助教授	浅田 秀夫	蚊アレルギーにおけるEBウイルス再活性化機構およびNK細胞の発癌機構の研究	16~17
	皮膚科学	講師	小林 信彦	DNA修復欠損トリコチオディストロフィーはいかにして紫外線発癌を回避するのか?	16~17
	精神医学	教授	岸本 年史	低線量放射線による中枢神経系細胞の遺伝子損傷修復についての研究	16~17
	精神医学	助手	高橋 良斉	ストレス誘発性海馬傷害に対するNMDA受容体遮断薬の保護作用の検討	16~17
	生物学	助教授	大西 健	RNA interferenceによるヒト癌細胞の放射線感受性の増感	16~17
	放射線医学	教授	吉川 公彦	大動脈瘤ステントグラフト治療:エンドリークが瘤内圧・瘤径に及ぼす影響に関する研究	16~17
	消化器・総合外科学	助教授	久永 倫聖	RECK/MMP-9balanceによる消化器癌悪性度判断のパラダイムシフト	16~17
	消化器・総合外科学	助手	池田 直也	腫瘍内間質を標的とした機能抗体作製による新たな膀胱癌治療	16~18
	胸部・心血管外科学	教授	谷口 繁樹	心筋梗塞後の不全心におけるReg遺伝子発現の機能的意義の解明	16~17
	脳神経外科学	講師	中瀬 裕之	脊髄損傷に対する再生治療-胚性幹(ES)細胞を用いた基礎的研究	16~18
	麻酔科学	助手	井上 聡己	脳虚血に対する保護物質としてのデルタオピオイドの基礎的研究	16~19
	耳鼻咽喉科学	助教授	家根 旦有	頭頸部癌の化学療法における分子標的薬を用いた増感効果の検討	16~17
	耳鼻咽喉科学	講師	山中 敏彰	前庭神経核における虚血性神経細胞障害とその可塑性	16~18
	眼科学	講師	松浦 豊明	分子設計を行ったハイドロゲルによる人工硝子体の開発	16~17
	口腔外科学	講師	山本 一彦	シクロオキシゲナーゼ2インヒビターによる口腔癌の化学予防に関する実験的研究	16~17

研究種目	所属	職	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究(C)(2)	第二内科学	助教授	濱田 薫	大気汚染粉塵が気管支喘息発症要因として次世代におよぼす影響についての研究	16~17
	成人看護学	助教授	玉田 章	自発的呼吸訓練器具を手術前後に使用した場合の呼吸機能回復への影響	16~19
萌芽研究	細菌学	教授	喜多 英二	病原体の上皮細胞接着に対する初期応答が感染感受性を規定する	15~17
	生物学	教授	大西 武雄	癌抑制遺伝子p53産物のC末端ペプチドによる放射線・温熱癌治療増感	15~16
	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	マウスES細胞から分化誘導した膵島細胞のアロ免疫原性に関する研究	15~16
	生化学	助教授	田中 康春	p73/ΔNp73を介した慢性関節リウマチ滑膜細胞増殖の制御	15~16
	第二生理学	教授	高木 都	胚性幹細胞からつくる腸管に壁内神経系をつくる	16~17
	第一生理学	教授	山下 勝幸	小胞体膜電位の光学的測定による細胞内膜系イオンチャネルの機能解析	16~17
	第一内科学	教授	斎藤 能彦	ヒト骨髄間質細胞を用いたペースメーカー細胞、および作業心筋特異的分化誘導法の開発	16~17
	第二内科学	助手	友田 恒一	肺気腫病態解明への新たなアプローチ:コラーゲン線維配列の定量的測定法を用いて	16~17
	寄生虫学	助教授	吉川 正英	ES細胞由来神経幹細胞の脳室内投与療法の開発-脳出血モデルでの検討-	16~17
	寄生虫学	教授	石坂 重昭	導入遺伝子制御によるES細胞から有毛細胞への分化誘導メカニズムの解明	16~17
	耳鼻咽喉科学	教授	細井 裕司	喉頭摘出者のためのサイレント音声入力装置の開発に関する研究	16~17
若手研究(B)	生化学	講師	亀岡 正典	HIV-1複製機構におけるポリADP-リボース合成酵素の役割についての解析	14~16
	精神医学	助手	根来 秀樹	奈良県橿原市の不登校生徒にみられる「引きこもり」症例の臨床的研究	14~16
	公衆衛生学	講師	斉藤 功	地域での高感度CRPとヘリカルCTによる冠動脈石灰化に関する疫学的研究	15~16
	神経内科学	講師	平野 牧人	遺伝性小脳失調原因遺伝子アプラタキシンの野生型及びスプライス変異型蛋白の機能解析	15~16
	口腔外科学	助手	今井 裕一郎	高悪性度口腔癌に対する化学シャペロン治療の応用に関する基礎的研究	15~16
	生化学	助手	太田 克矢	成熟脳における新しい細胞死抑制機構の解析	16~18
	病理病態学	助手	石田 英和	神経膠腫における癌関連遺伝子のエピジェネティックな転写制御に関する研究	16~17
	病理病態学	助手	島田 啓司	前立腺癌におけるリン酸化FADDを介した新規アポトーシスメカニズムの解析	16~17
	第一内科学	助手	川田 啓之	急性心筋梗塞モデルでeNOSを介する虚血領域縮小効果-分子学的機序の解明-	16~17
	放射線医学	助手	穴井 洋	経皮的ラジオ波凝固療法用細径電極針の開発と凝固範囲拡大に関する基礎的研究	16~17
	消化器・総合外科学	助手	上野 正嗣	造血幹細胞を用いた悪性腫瘍腹腔播種に対する治療の開発	16~17
	胸部・心臓血管外科学	助手	高濱 誠	抗Angiopoietin抗体の作成と非小細胞肺癌における臨床応用に関する研究	16~17
	耳鼻咽喉科学	助手	西村 忠己	骨導超音波の知覚メカニズムの解明とその臨床応用について	16~18
	耳鼻咽喉科学	助手	阪口 剛史	超音波補聴器実用化のための伝音効率向上に関する研究	16~18
	寄生虫学	助手	王寺 幸輝	免疫活性を利用した発毛再生とそのメカニズムの解明	16~17

看護部より

就任にあたって

看護部長 渡邊 フサ子



この度、奈良県立医科大学附属病院看護部に勤務することになりました。7年ぶりの職場ではありますが時の流れの速さと病院環境の激しい変化にとまどっております。

転勤を機に改めて思うことは、保健医療福祉制度の変革が、看護の現場にも大きな影響を与えていることです。看護部組織がそのことに対応するためには第一線で働く看護管理者の管理能力が求められることは言うまでもありません。医療経済の悪化によって、入院日数の短縮・病床利用率の上昇・在宅ケアへの移行などの課題が医療現場にもたらされました。このことから、私たちにとって、これまでのように「社会の変化や医療経済」に無縁でただ、「患者や家族の看護」を実施することのみを考えて看護管理を行うのでは役割が遂行できなくなって来ています。今、大学病院という大きな組織の中で自分の役割を考えると更にこのことが気がかりでなりません。

このように、リスクばかりを背負い込んでしまったような気がする看護の現場ですが、「私達看護部にできることは何か」を考え病院経営に少しでも貢献したいと考えています。そのためにも、看護部長として看護単位の看護管理者が役割を発揮し、看護職員がいきいきと働くことができる職場環境を整えていきたいと思っています。

奈良の地は光明皇后の手によって初めて看護が施された「看護の発祥の地」です。歴史的にも意味があるように感じています。厳しい病院環境ですが看護の本質を見失うことなく、看護の安全性の保証、質のよい看護実践、看護のあるべき姿をめざして努力したいと思っています。皆さまのご指導とご支援を賜りたいと存じます。

奈良の地は光明皇后の手によって初めて看護が施された「看護の発祥の地」です。歴史的にも意味があるように感じています。厳しい病院環境ですが看護の本質を見失うことなく、看護の安全性の保証、質のよい看護実践、看護のあるべき姿をめざして努力したいと思っています。皆さまのご指導とご支援を賜りたいと存じます。

国家試験結果

(学務課)

第98回医師国家試験は、平成16年3月に実施され、4月22日に合格者が発表されました。試験結果は、下表のとおりであり、本学の合格率は、3年連続で全国平均を下回る厳しい状況が続いています。

第98回医師国家試験

本学医学部医学科				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	国立	公立	私立
新卒	96	88	91.7	92.9	94.2	95.4	90.8
既卒	10	5	50.0	46.4	47.2	48.8	45.6
計	106	93	87.7	88.4	90.3	92.7	85.5

看護師・助産師国家試験

本学短期大学部H16年3月卒業				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	大学	短大	専門学校
看護師	76	70	92.1	91.2	97.0	94.4	95.9
助産師	15	15	100.0	91.1	83.7	91.5	94.2

本年度から国立大学が独立行政法人化を実施しましたが、本学も大学改革の推進に取り組む中で、設置者とも協議し、独法化実施の可否についての検討を行っていくことになりました。

今後、本学の教育・研究・診療についての一層の改革と推進を目指した取組をレポートしていきます。

(総務課)

将来計画委員会

〈4月8日開催〉

当面の課題について(4月13日開催の教授会でも報告)

学長から、急激な大学改革の流れの中で、本学として早急に検討すべき課題として、具体的に次の5点が挙げられ、協力を要請。

- ・ 独立行政法人化についての検討
- ・ 先端医学研究機構を中心とした研究の推進
- ・ 医学教育改革の推進(教育開発センターの稼働)
- ・ 大学の活性化を目指した教員の適正配置(教員定数の見直し)
- ・ 客員教授等、多様な人材の活用

先端医学研究機構の検討について

本年度設置された先端医学研究機構に設置すべき研究単位の分野や規模等について、喜多研究部長を委員長とする検討委員会を設置することを検討。〔4月13日開催の医学科教授会議に検討委員会の設置について報告〕

独立行政法人化の検討について

独法化については、独法化を前提とする検討ではなく、国立大学の法人化の状況を確認し、独法化のメリットとデメリットを十分見極めるとともに、設置者とも考え方のすり合わせを行っていく必要があるため、吉原医学科長を委員長とする検討委員会を設置することを検討。〔4月13日開催の教授会に検討委員会の設置について報告〕

平成16年度末定年退官予定教授の後任選考について

今年度末に退職が予定されている3教授(ドイツ語、公衆衛生学講座、産婦人科学講座)の後任選考について協議し、

- ・ ドイツ語については、本学における第二外国語のあり方、あるいは、コミュニケーション力という切り口での検討等、基本的な議論が必要
- ・ 公衆衛生学講座については、衛生学との関係をはじめ社会医学として、どういった分野が必要かという議論が必要
- ・ 産婦人科学講座については、周産期医療センターとの整合性を確認したうえで、早急に選考に着手すべき

という意見を得、ドイツ語及び公衆衛生学講座については、早急に検討に着手、産婦人科学講座については選考に関する基本方針を策定することを検討。〔4月13日開催の教授会に報告〕

〈5月6日開催〉

独法化及び先端医学研究機構に係る検討委員会の設置について

両検討委員会委員について、次のとおり委員を選任したことを報告。〔5月11日開催の教授会に報告〕

- ・ (仮称)独立行政法人化検討委員会
吉原 医学科長(委員長) 大崎 一般教育部長
伊藤 看護学科長 吉岡 小児科学講座教授
松田 事務局長 豊田 哲学教授
車谷 衛生学講座教授 福井 内科学第三講座教授
- ・ 先端医学研究機構検討委員会
喜多 研究部長(委員長) 高木 基礎教育部長
大西 生物学教授 榊 脳神経外科学講座教授
和申 解剖学第二講座教授 國安 分子病理学講座教授
斎藤 内科学第一講座教授 上野 神経内科学講座教授

外国語教育のあり方検討部会の設置について

ドイツ語の本田教授が今年度末で退官されることに伴い、本学の外国語教育をどうすべきかの抜本的な議論をしておく必要があり、外国語教育のあり方についての検討部会を設置することを検討。〔5月11日開催の教授会に検討委員会の設置について報告〕

公衆衛生学に係る将来展望について

4月の教授会議で、公衆衛生学講座の後任教授の選考をスタートさせる前に、医学と社会の接点におけるマクロ的視点に立った広い分野での、また衛生学を含めての基本的な検討を行う必要があると報告したことを受け、医療政策的観点から設置者とも話し合いを行い、地域の行政政策と関連づけた学問分野として具体化する必要性もあるため、学内外の有識者からも意見を聴き、この分野の将来展望を取りまとめることを検討。〔5月11日開催の医学科教授会議に報告〕

本学60周年事業について

今年度末で、本学が設置されて満60年となることに伴い、平成17年度に記念事業を実施するため夏頃までに内容を検討すべく、同窓会からも委員として加わってもらって検討委員会を設置することを検討。〔5月11日開催の教授会に検討委員会の設置について報告〕

〈6月3日開催〉

外国語教育のあり方検討部会の構成について

同検討部会委員を次のとおり選任したことを報告。〔6月8日開催の教授会に報告〕

大崎 一般教育部長 高木 基礎教育部長
平尾 臨床教育部長 伊藤 看護教育部長
森田 教育開発センター教授 豊田 哲学教授
澤浦 英語教授

医学科教員定数の取扱について

定数検討委員会からの答申を踏まえ作成した「医学科における教員定数についての申合せ(案)」の内容について検討。〔6月8日開催の医学科教授会議に提案、承認〕

公衆衛生学に係る検討の進め方について

公衆衛生学の基本的な議論を始めるにあたって、学内でこの分野を専門とする米増教授、車谷教授及び公衆衛生学の斉藤講師からこの分野の動向や将来展望についての情報収集を実施することを検討〔6月8日開催の医学科教授会議に報告〕

60周年記念事業企画委員会の構成について

同委員会に、学長を委員長とし、吉原医学科長、高倉病院長、同窓会からの代表の3名を副委員長に選任し、委員長と副委員長が相談の上、他の委員を選考することを検討〔6月8日開催の教授会に報告〕

教授会・学科教授会議

実質的に平成16年度に入り、部局長、将来計画委員会委員とも新しく選任され、看護学科の設置に伴い教授会も看護学科教授会議、医学科教授会議、(全体)教授会として開催されるようになりました。

看護学科教授会議

〔4月5日(臨時)承認〕

看護教育協議会規程の制定について

看護学科学務委員会規程の制定について

看護学科入学試験委員会規程の制定について

看護学科に係る3つの規程の制定について承認され、法規委員会に付託。〔法規委員会での審議をうけ、4月13日開催の学科教授会議で承認、4月1日にさかのぼり施行〕

〔4月13日報告〕

看護学科学務委員会・専門部会委員の選任について(充職以外、平成16年4月1日から1年及び2年間)

〈学務委員会委員〉

母性看護・助産学 教授 脇田 満里子 小児看護学 教授 江上 芳子
地域看護学 教授 城島 哲子 病態医学 教授 飯田 順三

〈カリキュラム部会委員〉

小児看護学 助教授 森 ウメ子 基礎看護学 講師 青山 美智代
精神看護学 講師 上平 悦子 老年看護学 講師 吉村 雅世

成人看護学 助教授 玉田 章 英語 講師 勝井 伸子
地域看護学 講師 牧野 裕子 母性看護・助産学 講師 渡辺 香織
〈学生生活部会委員〉

母性看護・助産学 助教授 上田 恵子 哲学 講師 池邊 寧
基礎看護学 講師 三毛 美恵子 地域看護学 講師 高井 俊子
母性看護・助産学 講師 浅見 恵梨子 地域看護学 講師 入江 安子
成人看護学 講師 岩本 淳子 精神看護学 講師 木村 洋子

看護学科入学試験委員会委員の選任について (充職以外、任期:平成16年4月1日から1年間)

成人看護学 教授 小河 育恵 老年看護学 教授 今井 充子
地域看護学 教授 城島 哲子

[5月11日承認]

看護学科設置記念行事について

伊藤学科長を委員長とした4名程度の教員からなる検討委員会を設置し、大学としての記念行事として開催する必要があるため吉原医学科長にもオブザーバーとして参加願ひ、至急検討を行うこと、委員の選任については学長に一任することを承認。

看護学科教員の大学・大学院入学に関する取扱要領の制定について

看護短期大学部で定められている「教員の他大学・大学院の入学に関する取扱」を看護学科においても取扱要領として制定することを承認。

[6月8日報告]

看護学科設置記念行事検討委員会委員の選任について

基礎看護学 教授 伊藤 明子 病態医学 教授 飯田 順三
成人看護学 教授 小河 育恵 地域看護学 教授 城島 哲子
生化学講座 教授 吉原 紘一郎(オブザーバー)

医学科教授会議

[4月13日報告]

医学科学務委員会・専門部会委員の選任について (充職以外、平成16年4月1日から1年及び2年間)

〈学務委員会委員〉

英語 教授 澤浦 博 生理学第一講座 教授 山下 勝幸

耳鼻咽喉科学講座 教授 細井 裕司

〈カリキュラム部会委員〉

生物学 教授 大西 武雄 衛生学講座 教授 車谷 典男

分子病理学講座 教授 國安 弘基 内科学第一講座 教授 斎藤 能彦

胸部・心血管外科学講座 教授 谷口 繁樹 総合医療学講座 教授 中村 忍

整形外科科学講座 助教授 矢島 弘嗣

〈学生生活部会委員〉

哲学 教授 豊田 剛 解剖学第一講座 教授 東野 義之

分子病理学講座 教授 國安 弘基 放射線医学講座 教授 吉川 公彦

中央手術部 教授 三井 宜夫 感染症センター 教授 三笠 桂一

寄生虫学講座 助教授 吉川 正英 化学 講師 山本 恵三

保健体育 講師 石指 宏通

医学科入学試験委員会委員の選任について (充職以外、任期:平成16年4月1日から1年間)

英語 教授 澤浦 博 衛生学講座 教授 車谷 典男

中央臨床検査部 教授 岡本 康幸

[5月11日報告]

教員定数検討委員会からの答申内容について

昨年10月に、学長の諮問委員会として設置された教員定数検討委員会において取りまとめられた答申内容を車谷委員長から説明の後、教授会議員からの意見聴取を実施。

[6月8日承認]

先端医学研究機構に係る各種規程の制定及び一部改正について

旧総合研究施設部が、今年度から先端医学研究機構の中に「施設部」として改組されたことに伴ひ、「先端医学研究機構施設部管理運営規程」の制定、及び動物実験施設、組換えDNA実験施設等4施設の管理運営規程を含む関連する7規程の一部改正について承認〔法規委員会に付託〕

(全体) 教授会

[4月13日承認]

兼業審査委員会委員の選任について (任期:平成17年3月31日まで)

脳神経外科学講座 教授 榊 壽右 病態医学 教授 飯田 順三

[4月13日報告]

法規委員会委員の選任について (任期:平成16年4月1日から2年間)

哲学 教授 豊田 剛 寄生虫学講座 教授 石坂 重昭

衛生学講座 教授 車谷 典男 耳鼻咽喉科学講座 教授 細井 裕司

病態医学 教授 飯田 順三

国際交流委員会委員の選任について

(充て職以外の任期:平成16年4月1日から2年間)

ドイツ語 教授 本田 陽太郎 解剖学第一講座 教授 東野 義之

生理学第二講座 教授 高木 都 神経内科学講座 教授 上野 聡

胸部・心血管外科学講座 教授 谷口 繁樹 地域看護学 教授 城島 哲子

将来計画委員会委員の選任について

(充て職以外の任期:平成16年4月1日から2年間)

生物学 教授 大西 武雄 病理病態学講座 教授 小西 登

脳神経外科学講座 教授 榊 壽右 小児科学講座 教授 吉岡 章

小児看護学 教授 江上 芳子

点検・評価委員会委員の選任について

(任期:平成17年1月11日まで)

輸血部 教授 藤村 吉博 老年看護学 教授 今井 充子

図書委員会委員の選任について

(任期:平成16年6月9日及び平成17年6月13日まで)

生物学 教授 大西 武雄 老年看護学 教授 守本 とも子

成人看護学 教授 小河 育恵

[5月11日承認]

教育開発センター運営に関する申合せの一部改正について

昨年5月に制定した同申合せに関し、本年4月から森田教育開発センター教授が就任されたこと、新しい部局長体制となったこと等に伴う一部改正について承認。

教育開発センター兼任教員の選任について

教育開発センター設置についての当初目標の達成に向け、教育開発センター運営委員会で検討された兼任教員について、次の7名の選任を承認。

衛生学講座 教授 車谷 典男 地域看護学 教授 城島 哲子

内科学第三講座 助教授 岡本 新悟 総合医療学講座 助教授 藤本 眞一

保健体育 講師 石指 宏通 生理学第一講座 講師 和田 佳郎

基礎看護学 講師 青山 美智代

[6月8日承認]

学内講師についての申合せの一部改正について

学内講師選考委員会で行われていた学内講師の選考について、選考基準を講師と同様とし、選考を教授会で行うこと等とした申合せの一部改正について承認

予算委員会についての申合せの一部改正について

看護学科の設置に伴い看護学科の教員を委員に加えること、及びオブザーバーであった部局長も委員とすることとした申合せの一部改正について承認

各学科の英語表記について

5月11日の教授会で、関係する教授により検討することを報告した両学科の英語表記について、本学医学部医学科を“Nara Medical University School of Medicine”に、同看護学科を“Nara Medical University School of Nursing”にすること等について承認

[6月8日報告]

図書委員会委員の選任について

(充職以外、任期:平成16年6月10日から2年間)

哲学 教授 豊田 剛 解剖学第二講座 教授 和中 明生

内科学第一講座 教授 斎藤 能彦 老年看護学 教授 守本 とも子

..... 平成16年度前期

奈良県立医科大学公開講座の開催について

(総務課)

来る9月4日(土)午後1時から、橿原文化会館大ホールにて、本学公開講座『くらしと医学』が開催されます。

今回は、感染症センターの三笠教授から「『かぜ』と肺炎 -その予防と治療-」、中央手術部の三井教授から「手術室のお話 -安心して手術を受けていただくために-」、公衆衛生学講座の米増教授から「衛生学・公衆衛生学の調査・研究と定量性」についての講演が行われます。

8月19日までの申込期限で参加者を募集しますので、多くの方の聴講をお願いします。

平成16年度 奈良県医師会学術奨励賞受賞者決定

本学の推薦委員会で審査を受け、推薦された次の3名が、7月7日に開催された奈良県医師会総会において表彰されました。

脳神経外科	非常勤医師	中川 一郎
総合診療科	非常勤医師	水野 麗子
泌尿器科学講座	助 手	鳥本 一匡

管財課技術職員表彰

○ 社団法人 日本電気技術者協会 関西支部 支部長表彰

エネルギーセンター 電気係長 丹波 啓之

平成16年5月24日、大阪市の「エルおおさか」で開催された「平成16年度 (社)日本電気技術者協会 関西支部総会」で表彰されました。

下ツ道

(編集後記)

学報の編集も3年目に入り、今号から新しい編集体制となつての学報の発刊となりました。

今後とも、皆様の協力を得て、学内の情報を皆様に伝えるべく、より読みやすく親しまれる学報を目指して編集委員一同努力してまいりますので、学報に対するご意見等を編集委員までお寄せください。

※ 前号(第8号)の7ページ、「新しい部局長体制について」において「看護短期大学部部長」について「職を廃止」と記載しましたが、「看護学科長が兼務」に、また、10ページの「附属病院中央診療部門の新設及び名称変更」の表に「病院病理部」の記載漏れがありましたので、訂正方お詫びいたします。

編集委員

- 山下 勝 幸 (生理学第一)
- 吉田 泰 彦 (英 語)
- 水野 文 子 (細 菌 学)
- 吉田 克 法 (透 析 部)
- 小林 雅 子 (看 護 部)
- 上田 恵 子 (母性看護・助産学)
- 南口 昌 克 (病院管理課)
- 久保 英 樹 (学 務 課)
- 大門 喜 信 (総 務 課)
- 山 本 徳 子 (総務課研究支援室)

(○印は委員長)